令和6年度　作新学院大学　数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）
自己点検・評価結果

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和6年度プログラムの点検・評価では、以下の点が指摘されている。 ・令和6年度の履修者数は14名（全学生の1.2%）となった。本プログラムは複数年開講のため、学年進行に伴い履修者数は80名程度となっていく見込みである。 ・プログラムには選択科目が含まれているため、今後も継続的に履修率の向上に努める必要がある。 ・作新学院大学 数理･データサイエンス･AI教育プログラム委員会では、現在、学生の関心を高めてプログラムの履修率を上げるために、新入生向け案内の配布、ガイダンスにおける周知および履修指導を実施しているが、今後はそれ以外の媒体（学内情報サービス、LMSなど）により学生への周知の強化を図る予定である。
学修成果	各科目の「授業評価アンケート」より、学生がプログラム科目の到達目標を一定程度以上達成できていること、学修成果の満足度が高いことから（プログラムに対する満足度4.39）、学修成果が十分に得られていると評価する。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	各科目の「授業評価アンケート」より、学生がプログラム科目の到達目標を一定程度以上達成できていること、学習内容の理解度が高いことから（授業内容のわかりやすさ4.06）、学生の内容の理解度が十分に高いと評価する。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	後輩等への推奨度に関しては、現時点では把握できていない。「授業評価アンケート」結果では、上記の通り達成度・理解度について学生から高い評価を得ているため、口コミでの推奨が期待できる。また、授業評価アンケートの結果は学生に対して公開していることから、新入生を含め今後この科目を履修する学生にも確認が可能である。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムは複数年開講であり、卒業要件のうち必修科目1科目、選択科目2科目で構成されている。令和6年度は選択2科目の履修が若干名だったため履修者数が少なかったが、今後、学年進行とともに履修者数は向上していく見込みである。ただし、履修率は選択科目の履修状況に左右されるため、これらの選択科目の履修者数をいかに増やしていくかが課題となっている。現在はガイダンス等を通して、学生への周知の徹底を図ることで対応していく予定である。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和6年度に開設されたばかりであり、現時点では本プログラムを修了した卒業生はいない。従ってこの項目に関しては、今後の取り組み課題となる。本学では、卒業時アンケート、卒業生アンケート、採用先ニーズ調査を通して卒業生の実態把握に努めており、本プログラム修了者の進路・活躍状況・企業等の評価についても、これらの調査を通して分析していく予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは令和6年度に開設したプログラムのため、現時点では産業界からの意見を聴取することは困難である。ただし、本学では外部識者を委員とした教育協議会を開催しており、その中でプログラム内容について諮問することが可能である。それらの意見を踏まえ、本委員会が教育プログラムの内容・手法等について検討していく。
数理・データサイエンス・ＡＩを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	身近にある様々なAIの具体的な事例を紹介することや生成系AIを実際に利用することで、学ぶ楽しさや学ぶ意識を理解させる工夫をしている。授業評価アンケートにおける満足度をこのことの指標の一つとみなしている。令和6年度は「コンピューターリテラシーⅠ」4.47、「統計学１」4.21、「情報と社会」4.50と高い評価であった。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	令和7年度入学者は、「情報Ⅰ」が必修化された新学習指導要領世代であり、その後は小学校からICTに触れているGIGAスクール世代の学生が入学してくることとなる。このような状況を考えれば学生にとっての「分かりやすさ」は年々変化していくことが予想され、変化に即応できるためのOODAループによる授業運営が求められることとなる。このためにもLMSの機能を積極的に活用することで、これを実現していきたい。